

「全能の神父と子と聖霊に賛美」

三位一体の主日・C年（16.5.22）

三位一体の主日の由来

早速、今日の祭日の由来ですが、救いの歴史における具体的な出来事を祝うのではなく、信仰の主題に基づくテーマ祝祭と言えましょう。

実は、三位一体の神秘を典礼で祝う必要性は、古代にさかのぼります。

すなわち、西暦4世紀ごろに正統的三位一体の教えに反対するような説をとる神学者が現れたので、信仰の自覚に於いても変化が起こったのであります。

したがって、古代教会においては、祈りの対象はあくまでも父なる神であり、キリストを通し、聖霊によって祈るようになったのであります。ところが、この区別は今や廃止され、父と子と聖霊の唯一の神が祈りの対象になり、三位一体の神こそ、キリスト教信仰のまさに中心的教義となったのであります。

ですから、典礼においても恐らく11世紀ごろのベネディクト会修道院における三位一体の祝祭日に由来すると考えられます。

父と子と聖霊の神の信仰体験

それでは、今日のみことば手掛かりに三位一体の神体験についてご一緒に考えて見ましょう。

先ほど歌った答詩編ですが、詩編8編からとられております。

まず、4節で天地万物の創造主なる父なる神に向かって、その御業である天と月を眺めると歌います。

そこで、天は神の指の業であり、月も星も神が造られたと褒め称えるのであります。

しかも、神の御業は、天地万物の創造で終わるのではなく、今もなお、すべてを支配しておられることを確認するのであります。

次に、詩編作者は、夜空に父なる神「あなた」の姿を感じたとき、視線をそこに佇んでいる自分自身に向けます。

「なぜ人に心を留め、
人の子を顧みられるのか。」と。

果てしない天体に比べれば、人間はまさにちっぽけな存在に過ぎませんが、

「あなたは人を神の使いに近い者として造り、

栄えと誉れの冠を授け、
あなたが造られたものを治めさせ、
すべてをその知恵にゆだねられた。」と賛美します。

ここで言われている「人を神の使いに近い者として造り」と言うくだりですが、「神にわずかに劣るもの」、「神よりもわずかに欠けたものとし」とも訳せます。

いずれにしても、創世記の人間創造の場面と共通点があります。それは、紀元前6世紀ごろ、捕囚民の中の祭司たちが編集したと考えられる次のようなくだりであります。

「われらの^{かたち}像に、われらの姿に似せて、人を造ろう。そして彼らに海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地上を這うものすべてのものを世話し養わせよう。」(創世記 1. 26)

とにかくこのような信仰体験をとおして、まさに神の現存を実感できるなら、神を表わす手立てを言葉の中に捜すのではないのでしょうか。

ですから、例えば自分の罪の赦しを深く体験したとき、詩編作者は、次のように^{うた}詩います。

「父がその子を憐れむように、主は主を畏れる人を憐れんでくださる。」(103. 13)

ですから、自分が出会った神を「父」のイメージで表現したと言えましょう。

また、救いの歴史をふりかえり、

「神は、かつて預言者たちによって・・・語られたが、この終わりの時代には、御子によってわたしたちの語られました」(ベブライ 1. 1-2) と宣べ、イエスこそ神の思いを完全に語られた「御子」であると悟ることができたのではないのでしょうか。

さらに、パウロは「神の霊があなたがたの内に宿っているかぎり、あなたがたは肉ではなく霊の支配下にいます。」(ローマ 8. 9)、と断言し、まさにキリストによって父なる神に結びついた人たちこそ、「神の霊」によって導かれていると説明できたのです。

とにかくこのような信仰体験によってこそ、神を「父」と「子」と「聖霊」として表すことができたのではないのでしょうか。つまり、三位一体の神体験こそ、まさにわたしたちの信仰告白にほかなりません。

聖霊の働き

そして、今日の福音はいみじくも、その聖霊の働きについてイエスが最後の晩餐の席上切々と語った最後の説教として伝えております。

そこで、まず、ヨハネはその最後の晩餐の席上のイエスの心境を、次のように感動的に描写しております。

「過越の祭の前に、イエスはこの世から父のもとに移るべき、自分の時が来たことを悟

り、世にいる自分に属する人々を愛するにあたって、その人々を極みまで愛した。」(ヨハネ 13.1) と。

そこで、今日の箇所ですが、冒頭で「言っておきたいことは、まだたくさんあるが、今、あなたがたには理解できない。」と念を押しております。

ちなみにここで「理解できない」とは、「担えない」あるいは「耐えられない」の意味にもとれます。ですから、「イエスの言葉がやがて体験する迫害に耐えられない」とも言えます。つまり、説教を聞いている弟子たちは、確かにイエスの言葉を理解できるけれども、イエスの言葉を語り続ける勇氣にも欠けている状態を示しているのではないのでしょうか。

ですから、弟子たちに聖霊が遣わされる必要がありました。

この父なる神から遣わされる「聖霊」は、「真理の霊」にほかなりません。

つまり、弟子たちを具体的に「導いて真理をことごとく悟らせ」て、くださいます。また、イエスご自身は、「自分から語るのではなく、聞いたことを語り、また、これから起こることを告げ」、しかも、「わたしは自分勝手に語ったのではなく、御父が命じたことを語った」(12. 49;14. 10) と、念を押しておられます。ですから、御子イエスは、御父から命じられたままに語り、聖霊はイエスの言葉を悟らせてくださるのであります。このように、父と子と聖霊は、一体となってわたしたちを導いておられるのです。

この素晴らしい三位一体の神の働きに心から感謝しましょう。